

『 On-line みんなで法華経を学ぼう! 』 vol.20

Nov. 2023

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .
(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 從地涌出品第十五』 (本門・序分 / 正宗分)

○ 『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も

隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○ 『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も

隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』

(法師品 二〇二頁 終五行)

○ 『其の習學せざる者は、これを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○ 「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』) (法師品 二〇九頁三行)

○ 『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくこ

とを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○ 『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、
りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※ 表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)

<安楽行品の復習>

・四安楽行

(P239・終行/P182・7行)

四安楽行とは一末世において法を説くに際しての『四つの基本的な心得』

「身安楽行」・行処ぎょうしょ・親近処しんこんしょ

「口安楽行」、「意安楽行」、「誓願安楽行」

『云何なるをか菩薩摩訶薩の行處と名くる。～ 忍辱の地に住し、柔和善順にして卒暴ならず、心亦驚かず、又復法に於て行ずる所なくして、諸法如實の相を觀じ、亦不分別を行ぜざる、是れを菩薩摩訶薩の行處と名く』

・親近するなどは

(P245・終5行/P187・1行)

これは「決して近づくな」という意味ではありません。「何かを求めたり」「相手のご機嫌を取る気持ち」で近づくことで、それを戒めたものです。

・仏さまとふたりづれ

(P259・7行/P197・終6行)

この「仏さまとともにある」、「仏さまと二人連れ」という気持ちこそは、信仰者のみに恵まれた、ひじょうに幸せな心境であります。

『常に坐禅を好んで閑かなる處に在って其の心を修攝せよ』 (二四三頁 四行)

・坐禅はだれにも必要

(P264・終2行/P201・8行)

『静かに座り、乱れがちになる心を取りまとめ (『修攝(しゅしゅう)せよ』)、無我の境地に入ることができれば、それがすなわち坐禅です。～ 宗教にとって欠くべからざる修行法となっているわけです。

・親近処とは

(P272・終2行/P207・終3行)

菩薩は因縁(縁起)を見極め、すべての物事を正しく観るといふ『空観(くうかん)』に徹することを対人関係の心得としなければなりません。～ 『空観』はつまるところ人間の本质(仏性)の平等をみることであり、その『平等』を悟るところに『自他一体』の実感が湧き、そこには『本当の慈悲』の発動があるからであります。

・口安楽行— あら探しは卑しいこと

(P298・4行/P228・4行)

『他人の好悪長短を説かざれ』 (二四六頁 七行)

たとえ或る人が現在は程度が低くても、未熟であっても、その人が懸命に努力している限り、～ 心ないけなし方をするのは、慎むべきです。大きな殺生であるといわなければなりません。 伸びるかもしれない芽を摘み取ってしまう、「大きな殺生」を犯すことになります。反対に、名ざしをしてその人の美点を賛歎するのは、世俗の修行の場合は、おおむねいい結果を生むようです。ところが、信仰者の場合は、賛歎の言葉がかえって増上慢を引き起こすことが多いのです。信仰上の修行は、それほど厳しいものなのです。(P302・終行/P232・2行)

・最高をめざして やさしく説く

真実の道・一仏乗の教えに基づいて、最高の智慧を得させることを目的として、説いてあげなければなりません。 困難といえ、これほど困難なことはありません。しかし、そこをやり遂げるのが「菩薩の使命」というべきでしょう。

・基礎的な修行にこそ妙境あり

『是の經を讀まん者は 常に憂惱なく 又病痛なく 顔色鮮白ならん～ 天の諸の童子 以て給使を爲さん』 (二五五頁 五行)

・譬中明珠論の意味

(P350・終3行/P272・7行)

法華經は、全ての衆生を仏の悟りに導いて行こうというギリギリ最高の教えです。ですから、不意にその教えを聞いても、なかなか信じにくく、かえって逆の結果を引き起こさぬとも限りません。それゆえ、仏さまはあからさまには(法華經を)お説きにならず、今まで方便という衣を着せ、小出しにしてお説きになって来られたわけです。

・基礎的な修行にこそ妙境あり

『是の經を讀まん者は 常に憂惱なく 又病痛なく 顔色鮮白ならん～ 天の諸の童子 以て給使を爲さん』 (二五五頁 五行)

・潜在意識まで清める

(P374・4行/P290・終2行)

『又夢むらく國王と作って～菩提樹下にあつて師子座に處し～無上道を成じ已り～涅槃に入ること煙盡きて燈の滅ゆるが如し』 (二五六頁 終二行)

お釈迦さまのご一生と同じ一生を、自ら経験する「夢」を見ることができる。(仏さまと同じ境地に達することができるのです) 心の奥の奥まで清浄になり、慈悲深くなり、これは、いつも仏を念じていることの証拠なのです。



<從地涌出品のあらすじ>

【十方分身仏と共にやって来た菩薩たちが、娑婆世界での広宣流布を誓う】——

【二五八頁一行】『安樂行品』で、末世にて菩薩が法を説く心構えを世尊が説き終えられると、他の国土(十方の世界)から集まって来ていた八恒河沙(ごうがしゃ)を超える無数の菩薩たちが立ち上がり、釈尊に合掌して次のように決意を申し上げました。

【二五八頁二行】「世尊よ。もしお許し下さるならば、私共もこの娑婆世界にとどまり、／
(『是(こ)の經典を護持し、讀誦し書寫し供養せんことを聽(ゆる)したまわば、當(まき)に此の土に於て廣く之(これ)を説きたてまつるべし』) 世尊のご入滅後にこの教えを護持し、讀誦して法を説き広めたいと存じますが如何でございましょう」と決意を申し上げたのでした。

【十方世界の菩薩たちの広布の誓いを、釈尊が断る】——

【二五八頁五行】すると世尊は、その申し出をキツパリとお断りになったのでした。

(『止(や)みね、善男子、汝等(なんだち)が此の經を護持せんことを須(もち)いじ』)「善男子よ。その必要はありません。そなたたちがこの娑婆世界に於いて『法華經』を護持(こじ)するには及びません。なぜならば、この娑婆世界にはもともと六万恒河沙(ごうがしゃ)という数限りない菩薩たちがおり、さらにその一人ひとりの菩薩にはそれぞれ六万恒河沙の弟子を従えています。そして、それらの者たちが私の滅後に『法華經』を護持し、説き広める役を担ってくれるのであります」とお応えになったのであります。

【<<本化の菩薩(待機の菩薩・大衆唱導の首)・地涌の菩薩>>が大地から現われる】——

【二五八頁 終二行】 仏さまがそうお説きになったその瞬間、娑婆(しゃば)世界全体が大きく揺れ動き、大地に割れ目ができました。そしてその大地の割れ目から無量千万億という計り知れない数の菩薩たちが湧き出して来たのでした。それらの菩薩たちは皆、金色(こんじき)に輝き、仏の徳相である三十二相を具えており、得も言われぬ眩(まばゆ)い光明(こうみょう)を全身から解(と)き放(はな)っているのでした。

【二五九頁一行】(『先より盡(ことごと)く娑婆世界の下(した)、此の界の虚空(こくう)の中に在(あ)って住(せり)』) これらの菩薩たちは、はるか昔より娑婆世界の下(した)の虚空(こくう)の世界に住んでいる者たちであり、／(『釋迦牟尼佛の所説(しよせつ)の音聲(おんじょう)を聞いて下より發來(ほつらい)せり』) 釈迦牟尼仏が自分たちに『教化を任せる』と仰(おっしゃ)られたそのお言葉を聞いて、こうして現われ出て来た菩薩たちなのであります。

【二五九頁 三行】これらの菩薩たちは《大衆唱導の首・だいしゅしょうどうのしゅ》と言って、多くの人々の先頭に立って大衆を教え導く指導者です。それぞれには六万恒河沙（ごうがしゃ）つまりガンジス河の砂の数の6万倍の数の弟子を従えています。また5万倍、4万倍、3万倍、2万倍、1万倍の弟子を率（ひき）いている者はもっと多いのです。以下、ガンジス河の砂の数と同じくらい、もしくはその半分、四分の一、千万億那由他（なゆた）分の一の弟子を率いている者はそれよりも多いのです。ましてや千万億那由他（なゆた）の弟子を率いている者、億万の数、千万、百万、一万、千、百、十人の弟子を率いる者はさらに多く、さらには五、四、三、二、一人の弟子を持つ者はもっと多いのです。そして、たった一人で煩惱から離れた精進の道を願って歩んでいる者はさらに多いのです。このように大地から湧（わ）き出て来た地涌（じゅ）の菩薩たちの数は無数で、数え尽くすことも譬えをもって表現することもできません。その数の多さは理解することができないほど無数であります。

【二五九頁 終三行】これらの菩薩たちが地中から現れると、次に虚空（こくう）へと飛び立ち、光り輝く七宝の多宝塔におられる**多宝如来**と**釈迦牟尼如来**のみもとに詣（もう）で二世尊の足（みあし）に額をつけて礼拝しました。そして無数の宝樹（ほうじゅ）のもとの獅子座（ししざ）に着座する分身仏（ぶんじんぶつ）のみもとにも詣（もう）で、その周りを右回りに三周して合掌して敬いの意思を表し、礼拝して讚歎申し上げたのでした。そして、**多宝如来**と**釈迦牟尼如来**をじっと仰ぎ見るのであります。

【二六〇頁 三行】こうして地から湧（わ）き出て来た菩薩たちが諸仏を讚歎しているうちに、五十小劫（しょうごう）という大変長い時間が経ちました。その間、釈迦牟尼仏は默然（もくねん）として端座（たんざ）されていました。／（『及び諸（もろもろ）の四衆も亦（また）皆（みな）默然（もくねん）たること五十小劫、佛の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂（おも）わしむ』）またその場にいた出家・在家の者たちも、菩薩たちが諸仏を讚える様子をただ静かに仰ぎ見ておりました。その五十小劫という果てしない時間が、仏さまの神力によって一同には、半日くらいの短さにしか感じませんでした。

ほんげ しだい じょうしゅしょうどう し
【本化の四大菩薩《上首唱導の師》が、釈尊にご挨拶申し上げる】――

【二六〇頁 七行】その出家・在家の修行者たちは、仏さまの神力によって無量百千万億という無数の地涌（じゅ）の菩薩たちが、虚空に満ち満ちている尊い情景を目にすることができたのでしたが、その菩薩たちの中に**四人の大導師**がいました。それは上行（じょうぎょう）菩薩、無辺行（むへんぎょう）菩薩、浄行（じょうぎょう）菩薩、安立行（あんりゅうぎょう）菩薩というの名の菩薩がたでありました。この**四大菩薩**は【上首唱導の師・じょうしゅしょうどうのし】と言って菩薩のなかでも最上位にある最高の指導者でした。この**四大（しだい）菩薩**は一同が仰ぎ見ているその場で、釈尊のみ前に進み出て、／（『世尊、少病少惱（しょうびょう しょうのう）にして安樂に行じたもうや不（いな）や』）「世尊よ、ご息災（そくさい）でお元気であられましたか。また世尊が人々を教化されるにあたり、お疲れはございませんか。そして導かれる者たちは、世尊のみ教えをちゃんと理解し、素直に受け止め、世尊にご苦勞とお手間を取らせてはいないでしょうか」とご挨拶を申し上げるのであります。

【世尊が四大菩薩に返答。そして地涌の菩薩たちの因縁を説明】——

【二六一頁五行】その挨拶を受けられた**世尊**は、次のようにお応えになりました。

「善男子よ。私は無事息災（ぶじそくさい）で大丈夫です。衆生の教化も苦労はなく、皆、素直に私の教えを受持しています。疲れはありません。なぜならば／（『是（こ）の諸（もろもろ）の衆生は世世（せせ）より已來（このかた）、常に我が化（け）を受けたり』）**諸々の衆生ははるか昔、前世からずっと私の教化を受けているからです。**／（『亦過去の諸佛に於て供養・尊重（そんじゅう）して諸（もろもろ）の善根（ぜんこん）を種（う）えたり』）また、**過去世より諸仏のもとで精進し、仏に対して供養・尊重（そんじゅう）して善い行いを積み重ねて来ている者たちです**」

【二六一頁 終四行】（『此の諸（もろもろ）の衆生は始め我が身を見、我が所説（しよせつ）を聞き、即（すなわ）ち皆（みな）信受（しんじゆ）して如來の慧（え）に入（い）りにき』）「ですから、**今世において私に巡り合っ**て初めて教えを聞いても、**私の教えをたちまちに信受し、すぐに仏の悟りへの道へと入**って行くことができるのです。しかし今世、／（『小乗を學せる者をば除く』）小乗の教えに触れてそれで十分だと思っている人とは訳（わけ）が違います。／（『我（われ）今亦（いままた）是（こ）の經を聞いて佛慧（ぶつて）に入（い）ることを得せしむ』）しかし私は、そうした『**自らの救われ**』だけで十分だと思っている人にも、**この『法華經』をもって仏の智慧・眞の悟りを得る道に入れようとしているのであります**」

【世尊のお応えに対して、四大菩薩が感動を申し上げる】——

【二六一頁 終二行】その時、**四大菩薩たち**は大いに悦び、世尊に申し上げたのでした。

「世に優れた大いなる雄々（おお）しい世尊。『**大雄（たいおう）世尊**』よ。諸々の衆生を教化することがご苦労ではなく、容易（たやす）いことだと仰（おっしゃ）くださいましたことは。大変有り難いことです。とても有り難いことです。衆生が諸仏の智慧についてお尋ねすると、世尊はすぐそれを教えてください、そして、すっかりと衆生がその教えを信受して理解するということは、なんと素晴らしいことでしょうか。私どもは大変有り難く、言い知れぬ大いなる悦びに包まれる思いでございます」

【二六二頁 三行】それをお聞きになった**世尊**は、菩薩たちの指導者格である【**上首唱導の師（じよしゅしょうどうのし）**】である**上行・無辺行・浄行・安立行の四大菩薩**に向かってお褒（ほ）めの言葉をおかけになったのでした。

「よろしい。よろしい。善男子たちよ。よくぞ眞の悦びをもって如来に隨喜（ずいき）の心を起してくれました」

【四大菩薩や地涌の菩薩たちを見て、弥勒菩薩らは疑問を覚え、釈尊に問う】——

【二六二頁 五行】するとこれまでの情景を目にしていた**弥勒（みろく）菩薩**と八千恒河沙（ごうがしゃ）という数えきれない**無数の菩薩**たちは、次のような思いを抱いたのでした。

「私たちは昔から世尊にお仕えして今日まで精進してきたが、このような大菩薩たちが突然大地から涌き出て、世尊の御前（おんまえ）で親しくご挨拶を交わすなど、これまでに見たことも聞いたこともないことだ。一体何故、このような出来事が起こるのだろうか？ 不可思議だ」と一同は疑問に思い、不審に思ったのでした。

【二六二頁 七行】その時**弥勒菩薩**は、八千恒河沙の数多くの菩薩たちが**自分と同じ疑問を抱（いだ）**いていることを察知しましたので、仏さまにお伺いを立てたのでした。

「この無量千万億という数えきれない菩薩たちは、これまでにお会いしたことのない方々ばかりです。世尊よ。これらの菩薩たちは一体何処から来られたのでしょうか？ また、どのような理由があってお集まりになったのでしょうか？ これらの菩薩たちはみな素晴らしい大神通力を具え持っておられようにお見受けします。智慧も深く計り知れません。そればかりか堅固な意志を持ち、強い忍耐力を具えておられます。まさに世の全ての人々が、『お会いしたい』と願いたくなるような素晴らしい菩薩たちばかりです。世尊よ。これらの菩薩たちは、一体、何処から来られたのでしょうか？」

【二六三頁 一行】「しかもそれぞれの菩薩には、ガンジス河の砂の数のように無数の弟子たちを引き連れています。ある大菩薩はガンジス河の砂の数の6倍の弟子を率（ひき）いて、一心に仏の悟りを求め、仏を供養し、教えを護持しています。またある大菩薩はガンジス河の砂の数の5万倍の弟子を引き連れ、そして4万、3万、2万、一万、千、百倍の弟子を率いている菩薩もいます。そのほかガンジス河の砂の数と同じくらい、半分、三分の一、四分の一、億万分の一、千万那由他（なゆた）分の一、万億、二分の一億、千、百、五十、十人、そして三、二、一人の弟子を連れている菩薩はもっと多くいます。中には弟子を従えることなく単独で来て、一人修行を楽しんでいる菩薩も数えきれません」

【二六三頁 終三行】「以上の無数の菩薩たちを数え上げようと、計算機を用いて算出を試みても数え尽くすことはできません。恒河沙（ごうがしゃ）劫（こう）というガンジス河の砂の数という無数の劫（こう）の年数を費やしても、決して数え尽くすことはできません。この素晴らしい大威徳（たいいとく）を具え、正しい精進を尽くしている大菩薩たちは、一体、誰が教えを説いて教化したのでしょうか？ 誰が育てられたのでしょうか？ この菩薩たちは、誰に従って発心し、どの仏さまの教えを信じ、共鳴・感嘆（かんだん）し、どの仏さまの教えを実践して身に具えたのでしょうか？」

【二六四頁 二行】「これらの菩薩たちが素晴らしい神通力を具えているのは、四方の大地が震（ふる）い裂（さ）け、その中から湧き出て来たことから解ります。世尊よ。このようなことは、未（いま）だかつて目にしたことがありません。どうかこれらの菩薩たちが住んでいる国の名前をお教えてください。私はあらゆる諸国を行脚（あんぎゃ）して様々な経験をしておりますが、このような出来事は初めてです。さらにこの菩薩たちを一人として、私は知りません。忽然（こつぜん）と現れ出（い）でたその理由をどうぞお教えてください。今、ここにいる百千万という数の菩薩たちも、みなそれを知りたいと願っています。こうした現象は、起こるべくして起きた因縁があるはずで、無量の徳分を具え持っておられる世尊よ。我等一同の疑問を晴らしてくださいますようお願い申し上げます」

と弥勒菩薩は懇願したのでありました。

【十方分身仏と共にやって来た無数の菩薩が、同様の疑問を十方分身仏に問う】——

【二六四頁 終四行】ちょうどその時、十方世界の無量千万億という無数の国々からやって来た釈迦牟尼仏の分身諸仏（ふんじん しょぶつ）は、釈尊を遠く八方の周囲で取り囲む美しい木々のもとの獅子座で端座していました。そしてその分身諸仏に付き従う菩薩たちも、大地から湧き出（い）でた大菩薩たちの出現を不思議に思い、その理由をそれぞれが仕えている仏さまにお尋ねしたのでありました。

「世尊よ。この無量無辺阿僧祇（あそうぎ）という無数の菩薩たちは、一体、何処からやって来たのでありましょうか？」

【以上の質問に対して、十方分身仏が答える】——

【二六五頁一行】すると十方分身仏は、その問に対してそれぞれ答えたのでありました。「善男子よ。しばらく待ちなさい。この娑婆世界に一人の菩薩がいます。弥勒菩薩という菩薩です。この弥勒菩薩は釈迦牟尼仏から必ず仏に成ると保証されている菩薩です。釈迦牟尼仏の次に娑婆世界で仏と成る菩薩です。その弥勒菩薩が同じ質問をしています。そして釈迦牟尼仏がその問に対してお答えを下さるはずです。みなの方たちも、その釈迦牟尼仏のお答えを待って、しっかりと聴受（ちょうじゆ）するのです」

《本門 正宗分》～

【釈尊が弥勒菩薩の質問に対してお答えになる。重大事を説く宣言】——

【二六五頁五行】その時、釈尊は弥勒菩薩に仰（おお）せになりました。

「よろしい。阿逸多（あいつた・弥勒菩薩のあだ名）。よくぞこの重大事について質問しました」
そして、多くの菩薩たちに向かってお答えになられたのでした。

／（『一心に精進の鎧（よろい）を被（き）、堅固（けんこ）の意（こころ）を發（おこ）すべし』）「みなの方たちよ。一切の混じり気のない心で真理を受け止め、教えられたことは疑いを持たないという固い鎧（よろい）のような固い決意を持たねばなりません。／（『如來今諸佛の智慧～諸佛の威猛大勢（いみょうだいせい）の力を顯發（けんぱつ）し宣示（せんじ）せんと欲す』）私は今、諸仏の智慧と自由自在な神通力、そして獅子王（ししおう）の如く巨大で何ものにも負けずあらゆるものを感化していくという偉大なる大徳力によって私は、すべてを明らかにして説き示すことにしましょう」と宣言なされたのでありました。

【二六五頁終五行】世尊は重ねて言われました。「菩薩たちよ。純粋な心で精進しなければなりません。私はこれより重大事を説きますが、決して疑惑の心を持ってはなりません。

【(偈)二六五頁終二行】（『佛智は思議（しぎ）し叵（がた）し汝今（なんじいま）信力を出（いだ）して忍善（にんぜん）の中に住せよ』）なぜならば仏の智慧は、仏でなければ理解できない難しいものであるために、疑惑を持たない純粋な心でなければ真実を理解するということができせん。教えを信受する純粋で強い心、精神を統一して散乱しない定まった心で、これから私が説く真実をしっかりと聞くことに専念しなさい」

【(偈)二六五頁終行】「みなの方たちは、これまで聞いたことのない話を、これから聞くことになります。【(偈)二六五頁終行】（『我今（われいま）汝（なんじ）を安慰（あんい）す疑懼（ぎく）を懷（いだ）くこと得（う）ることなかれ』）私はみなさんが心安らかに、安寧（あんねい）になるためにこれから真実を説きます。ですから何を聞いても驚き、疑いを持ってはなりません。／

【(偈)二六六頁一行】（『佛は不實（ふじつ）の語（ことば）なし～第一の法は甚深（じんじん）にして分別（ぶんべつ）し叵（がた）し是（かく）の如きを今當（いままき）に説くべし汝等（なんだち）一心に聽（き）け』）【二六六頁一行】）仏の言葉には嘘はありません。仏の智慧は計り知れない奥深く広いもので、最高の教えも同様に深（ふか）で広大なものです。普通の人にはなかなか理解できないものであります。その最高の教え・真実の教えを今こそ明かします。みなさん。一心に聞くのです」

【釈尊が、久遠の昔より教化しているという《真実》を説く】——

【二六六頁 四行】世尊はあらためて弥勒菩薩をはじめとする菩薩たちに告げられました。

『我今此(こ)の大衆(だいしゅ)に於て汝等(なんだち)に宣告(せんごう)す』「今こそみなさんに宣言します。阿逸多(あいつた)よ。大地から湧き出(い)でた無量無辺阿僧祇(あそうぎ)という無数の大菩薩たちは、みなさんがこれまで見たこともない大菩薩たちです。／『我是(われこ)の娑婆世界に於て阿耨多羅三藐三菩提を得已(えおわ)って、是(こ)の諸(もろもろ)の菩薩薩を教化示導(きょうげじどう)し』じつはこれらの大菩薩たちは、私がこの娑婆世界において、私が仏の悟りを得てからのちに教化した者たちです。そしてこれらの者たちは、心を調伏(ちようぶく・心乱れることなく、教えに従う心)持つ境地にいる者で、仏の悟りへの道を歩むことを力強く決意した者たちです。これらの菩薩たちは、みな娑婆世界の下の虚空(こくう)に住する者で、仏のあらゆる法に精通し、しっかりと身に具えている者たちであります」

【二六六頁 終三行】『阿逸多(あいつた)、是(こ)の諸(もろもろ)の善男子等(とう)は～ 常に静かなる處(ところ)を樂(わが)い勤行(ごんぎょう)精進して未(いま)だ曾(かつ)て休息(くそく)せず』「阿逸多(あいつた)よ。この者たちは、常に静かな場所で一心に修行に励むことを望み、怠けて休むことなどありません」

【他者をあてにせず、自らが主となる地涌の菩薩。その徳分】——

【二六六頁 終二行】『亦人(またにん)・天(てん)に依止(えい)して住せず』「また、他の人をあてにしたり、天の神々を頼りとせず、自主的で自らが主となり、他を依(より)り所とするということがありません。そして、諸仏と同じ法を悟ることを常に望み、そのために一心に努力精進しています」

【(偈)二六七頁 三行】『阿逸(あいつ)汝當(なんじまき)に知るべし 是(こ)の諸(もろもろ)の大菩薩は 無數劫(むしゅうこう)より來(このかた) 佛の智慧を修習(しゆしゅう)せり』「阿逸多(あいつた)よ。この者たちは、無数劫(むしゅうこう)という計り知れない過去からずっと仏の智慧を学び、納めてきた方々です。／『此れ等(ら)は是(こ)れ我が子なり 是(こ)の世界に依止(えい)せり』そしてこの者たちは、私の子であり、この娑婆世界に住している者です。これらの菩薩たちは、常に清浄な行いを実践し、多くの人々の中であって物欲に負けることがなく、心乱れて騒がしくなることを好みません。／『所説多きことを樂(わが)わず』そして真実以外の余計なことを説くことを好みません。静かな所で修行を励むことを好み、昼夜休むことなく、一心に努力精進している方たちです。そして仏の悟りを求めるがゆえに、いままで 全員がこの娑婆世界にとどまって修行しているのであります。仏の悟りを求める志が強く、常に努力し、法を説く時は何ものにも畏(おそ)れはばかりがなく、素晴らしい説法をするのです」

【(偈)二六七頁 終四行】「私がマガタ国の伽耶城(がやじょう)の近くの菩提樹のもとで悟りを得た時から、私はこの者たちを教化し、仏道を求める心を起こさせました。精進が後戻りするようなことなどなく、すべての者たちは必ず仏の悟りを得るであります」

【(偈)二六七頁 終行】『我今(われいま) 實語(じつご)を説く 汝等(なんだち) 一心に信ぜよ 我(われ) 久遠より來(このかた) 是(こ)れ等(ら)の衆を教化せり』「私は今こそ真実を説きます。みなの方たちは心を純粹にして私の言葉を信じなさい。じつは、私にはるか昔から、これらの菩薩たちを教化しているのです」

【釈尊が久遠の昔より教化してきた《真実》を、弥勒菩薩らが疑問に感じる】——

【二六八頁二行】その時、弥勒菩薩およびこの法会（ほうえ）に集まっている無数の菩薩たちは、心の中で次のような疑惑を覚えていました。

「世尊がお悟りになられてから今日至るまでの時間で、一体どのようにして無量無辺阿僧祇（むりょうむへんあそうぎ）という無数の菩薩たちを教化し、しかも仏の悟りを得ようとするまでに育て上げられたのであろうか？不可思議である」

【この疑問を、弥勒菩薩が釈尊に問う】——

【二六八頁五行】**弥勒（みろく）菩薩**は、無数の菩薩たちが自分と同じように疑問を覚えていることを感じ取りましたので、仏さまにお尋ねをしたのであります。

「世尊よ。世尊が太子の折に釈迦族の居城（きょじょう）である伽耶城（がやじょう）を出て、そこから程遠くない菩提樹下において悟りを得られました。／『是（こ）れより已來（この）か）始めて四十餘（よ）年を過ぎたり』そして今日（こんにち）に至るまで四十年あまりが経ちました。世尊よ。この四十年あまりの期間で、どのようにしてこれら無数の大菩薩たちを教化され、そして仏の悟りを得ようとするまでに育てられたのでしょうか。不可思議でなりません」

【二六八頁終三行】「世尊よ。これらの大菩薩たちの数は人間が千万億劫（せんまんのここう）という果てしない時間を費やして数えても数え尽くせないほど無数です。これらの素晴らしい大菩薩がたは久遠の昔より数限りない仏さまに仕え、そして善なる精進を積み重ねて来てようやく今の素晴らしい境地にまで達せられた菩薩がたであります」

【(偈)二七〇頁七行】「これらの菩薩がたは菩薩道を確実に歩み、そして世間の汚（けが）れに染まることなく清らかな御身（おんみ）であります。それはあたかも／『世間の法に染（そ）まざること 蓮華（れんげ）の水に在（あ）るが如し』『蓮の華が泥水に染まることなく美しく咲きほこっている』のと同じであります。その菩薩がたが大地から涌（わ）き出て来て、そして仏さまを恭敬（くぎょう）讃歎（さんたん）して御前（おんまえ）で控えておられます。その菩薩がたを、世尊がご成道なされてから今日（こんにち）までの四十年間余りで教化されたというのは、とても信じ難きことです。考えようがございません」

【《父少子老（ふしょうじろう）の譬え》で、弥勒菩薩が疑問を警える】——

【二六九頁一行】【(偈)二七〇頁終二行】「このことを譬（たと）えて申しますと、顔が若々しくて美しく、髪の毛は真っ黒で、年が二十五歳である人がいたとしましょう。その人が、髪が白くて、顔中が皺（しわ）だらけの百歳の老人を指さして、『これは私の子です』と言ひ、反対にその百歳の老人が二十五歳の青年を『これは私の父です。私を育ててくれました』と言ったとしましょう。【(偈)二七一頁一行】『父は少（わか）くして子は老いたる世を擧（こぞ）って信ぜざる所ならんが如く』父親が若くて子どもが年をとっているという話は、とても信じられない話です。世界中の誰もが信じられない話です。このたびの仏さまのお話は、これとまったく同じであります」

—— 【父少子老（ふしょうじろう）の譬え】

【釈尊が地涌の菩薩を教化したことを弥勒菩薩が疑問に感じる理由】——

【二六九頁 四行】『得道(とくどう)より已來(このかた)其(そ)れ實(じつ)に未(いま)だ久(く)しからず』「世尊はご成道なされてからそれほど長い時間が経っていません。ところがこれらの大菩薩がたは無量千万億劫という果てしない過去から仏道を歩み実践し、一心に精進を重ねて素晴らしい境地に達した方々ばかりです。しかも無量百千万億の数にも及ぶというあらゆる三昧行(さんまいぎょう)にも自由に住することができ、大神通力を具え、いつまでも善い行いを実践し続けられる方々です。さらに善い教えを次第次第に身に付けて行き、その結果、あらゆる人に的確に法を説き分け、巧みな説法を行うことができる方々です。そして、どのような難しい質問にも自由自在に答える能力を具えられ、何ものにも動じない強い精神力をお持ちです。人を感化せずにはおかぬ徳相を具え、気品に満ちたお姿は、／『人中(にんちゅう)の寶(たから)として、一切世間に甚(はなは)だ爲(こ)れ希有(けう)なり』まさに『人の宝』として、この地球上においては稀(まれ)な存在となる菩薩方です」

【二六九頁 終五行】「世尊はご自身が仏の悟りを得たのちに、これら的大菩薩がたに菩提心を起こさせ、仏の悟りを得ることができるまで育てて来たと仰(おお)せになりました。世尊がご成道されてからさほど長い年月が経(た)っておりませんが、世尊はわずかな時間で、これら的大菩薩がたを教化したという大偉業・大功德を成し遂(と)げられたこととなります。私どもは仏さまのどのようなお言葉も伺っても、信じ、受持し、仏さまのお言葉に嘘があるなどとは全く思っておりません。世尊のお言葉のすべてを心底から信じ、理解させていただいております。しかし、菩薩道の歩みに入ったばかりの初心の菩薩『新発意(しんぱつち)の菩薩』が、世尊の滅後に於いて世尊の以上のお言葉を聞くと、／『信受せずして法を破(は)する罪業(ざいごう)の因縁(いんげん)を起(おこ)さん』真意を正しく受け止めることができずに、法に対して不信を起こすという罪を犯(と)りかねません」

【理解し難い≪真実≫の真意の解説を、弥勒菩薩が懇願】——

【二七〇頁 一行】【(偈)二七頁 八行】『唯然(ゆいねん)、世尊、願(ねが)わくは爲(ため)に解説(げせつ)して我等(われら)が疑(うたが)いを除(た)きたまえ。及び未來世(みらいよ)の諸(もろもろ)の善男子(ぜんなんし)、此(こ)の事(こと)を聞(き)き已(お)わりなば亦(また)疑(うたが)いを生(な)ぜじ』／『願(ねが)わくは佛未來(ぶつみらい)の爲(ため)に演説(えんせつ)して開解(かいげ)せしめたまえ～是(こ)の無量(むりやう)の菩薩(ぼさつ)をば云何(いかに)して少時(しょうじ)に於(お)て教化(けうわ)し發心(ほっしん)せしめて不退(ふたい)の地(ち)に住(す)せしめたまえる』」「世尊よ。どうぞ以上のお話について、分かり易く、詳しくその理由をお教えてください。そして我々が今感じている疑問が晴れるようお教え願います。そのご説明を頂戴できれば、未來の世の弟子たちは一つとして疑いを生ずることはないであります。これらの素晴らしい無数の菩薩がたを、どうして、ほんのしばらくの間で教化なされたのでしょうか。どうぞこのことを、お教え願います」と、弥勒菩薩が法会(ほうえ)の菩薩たちを代表してお尋ねしたのであります。



『^や止^{ぜんなんし}み^{なんだち}ね、^こ善^{きょう}男^{ごじ}子、^{もあ}汝^{ゆえ}等^{いか}が^{わが}此^の經^を護^持せん^{こと}を^須い^じ。所以^は何^ん、我^が娑^{しゃ}婆^ば世^せ界^{かい}に^自ら^{おのずか}六^{まん}萬^{ごう}恒^が河^{しゃ}沙^{とう}等^の菩^ぼ薩^つ摩^ま訶^か薩^{さつ}あり』(二五八頁 五行)

地^じ涌^ゆの菩^ぼ薩^{さつ}とは一 (大^{だい}衆^{じゆ}唱^{しやう}導^{どう}の首^{しゆ}) (P383・6行/P299・6行)

『一^の菩^ぼ薩^つ皆^な是^れ大^{だい}衆^{じゆ}唱^{しやう}導^{どう}の首^{しゆ}なり』(二五九頁 三行)

—— この菩薩たちは、多くの人々の先頭に立って、大衆を教え導く人たちです。

地から湧き出した菩薩というのは、苦しみや悩みの多い現実の生活を体験し、その中で修行を積み、世俗の生活をしていながら高い悟りの境地に達した人々のことを言うのです。「自ら苦しみや悩みを体験し、そこを突き抜けて来た人」は、本当の力を持っています。そんな人こそ、人を教化する力を具えているのです。

そういう地涌の菩薩に対して、この娑婆世界を任せられたということは、つまり、この世界はその住人である我々自身の力によって清浄にし、平和にし、我々自身の手で幸福な生活を築き上げなければならないのだ—— という教えなのです。

自分たちの浄土は、自分たちの責任において築き上げなければならない。自分たちの幸福は、自分たちの努力によって作り出さなければならない。—— なんと力強い、積極的な教えでしょう。

本^{ほん}化^げ・迹^{しゃ}化^{つげ}の菩^ぼ薩^{さつ} (P391・1行/P305・終3行)

仏さまと同じような三十二相をそなえ、身から金色(こんじき)の大光明を放っているというのですから、殆んど仏に近い菩薩であるということがわかります。仏教学上では、久遠寺実成の本仏によって教化された菩薩であるとして、**〈本化の菩薩〉**と称しています。

それに対して、お釈迦さまによって教化された菩薩を**〈迹化の菩薩〉**と呼んでいます。

本^{ほん}化^げの菩^ぼ薩^{さつ}は待^{たい}機^きの菩^ぼ薩^{さつ} (P391・終2行/P306・7行)

すでに久しい前から、悟りを開いていた人たちです。そして虚空に住していたというのです。娑婆世界救済への発動に、待機していたわけです。

実^{じつ}践^{せん}者^{しゃ}として具^ぐ現^{げん}する菩^ぼ薩^{さつ} (P392・8行/P306・終2行)

大地をメリメリと引き裂いて発来(ほつらい)する・・・それは大変な力が必要です。この菩薩がたは、そういった力の持ち主でありました。～ 現実社会におけるたくましい実践力を持つ菩薩であることを意味しているのです。～ 実践力に満ちた宗教者であり、指導者であるわけです。

げんじつせいかつ たいけん 現実生活の体験あつてこそ

(P393・3行/P307・6行)

大地をくぐり抜けるということには、現実社会の生活を体験するという意味があります。～ 大衆のなかに飛び込み、その苦しみをじかに触れる必要があるのです。人間の弱さ、醜さを、肌で感じ取る必要があるのです。そうしてこそ、本当に人間を指導し、引き上げることができるのです。

さべつそう とお びようどうそう 差別相を通して平等相へ

(P394・6行/P308・3行)

もうひとつ角度を変えて、このことを観じてみますと、これは、我々のものの見方の発展する過程を教えているものと受け止めることができます。

① はじめ娑婆世界の下の虚空に住していたというのは、つまり《空の悟り》そのものの中にいたということです。《空の悟り》とは、《人間の本質は仏性である》という真実です。～ もし差別相を無視して、ただ人間の平等相だけを観じている人があったとしたら、～ ただその人自身が立派であるというだけであって、一向に世の救いとはならないのです。

② ところが、現実の人間にあらわれている様々な差別相を直視し、その差別相がどこから生じてくるのかということを見極めるならば、そこに《生きた人間の救いの道が開発される》でしょう。この《現実の人間の差別相を見きわめる》ことが、《大地をくぐり抜けること》にほかなりません。

③ 大地をくぐり抜けて出現したこの菩薩がたが、虚空に浮かぶ多宝塔を礼拝してから、虚空にとどまることが述べられています。

これは何を意味するのと言いますと、ふたたび《仏性の平等》を観ずるということとであります。

差別相を直視することにとどまっていたは、ついその《差別相にとらわれがちになります。ですからもう一度そこを突き抜けて、《人間の本質である仏性を見なければなりません。

《こういう仏性観・平等観を得た時、はじめて広大無辺な慈悲心が生まれ、すべての生あるものの救済者としての資格が完成するわけです。

このように、人間に対する見方を、①本質の『平等相』から、②現実の『差別相』へ、それから再び③差別相を突き抜けた『本質の平等相』へと深めていく筋道（「下方の虚空」⇒「大地」⇒「娑婆世界の虚空」）という過程を象徴させてあるわけです。

《^{しゆい}思惟のひととき ①》

「自ら苦しみや悩みを経験し、そこを突き抜けて来た人は、本当の力を持っています。そんな人こそ、人を教化する力を具えているのです」と庭野開祖は説きます。

— これまで多くの苦悩・悩みを持っていた（持っている）私たちだからこそ、「人を教化する力を具えているのだ」と説かれていることについて、あなたはどのように感じますか。考えてみましょう。

《^{しゆい}思惟のひととき ②》

①ただ人間の平等相だけを観じているだけでは、一向に世の救いの力とはならない。しかし、②現実の人間にあらわれている様々な差別相を見極めるならば、そこには、生きた人間の救いの道が開発される。ところが、差別相を直視することにとどまっていたら、その差別相にとらわれがちになって仕舞います。そこで③平等相を観じ、再び仏性の平等を観ずるならば、はじめて広大無辺な慈悲心が生まれ、生きた人間を救うエネルギーとなり、すべての生あるものの救済者としての資格が完成すると庭野開祖は説きます。

この①本質の『平等相』⇒ ②現実の『差別相』⇒ ③差別相を突き抜けた『本質の平等相』へと深めていく筋道を、あなたはどのように受け止めますか？

『先より 盡く娑婆世界の下、此の界の虚空の中に在って住せり。是の諸の

菩薩、釋迦牟尼佛の所説の音聲を聞いて下より發來せり』 （二五九頁 一行）

— この菩薩たちは、ずっと前から娑婆世界の下虚空にいたのですが、釈迦牟尼仏のお説きになった言葉を聞いて、急いでみもとに参ってきたのです。

つまり、前の世において既に迷いを離れた境地にいたにもかかわらず、この娑婆世界を救うために、わざわざこの世界の苦しみや悩みを経験し、その苦しみから抜け出して来たのだというのです。この「わざわざ苦しみを経験する」ということは、非常に大切な過程であって、前にも申した通り、それでなければ本当に娑婆の人間を救う神力は身に付かないのです。尊い教えです。

《^{しゆい}思惟のひととき ③》

「この地涌の菩薩たちは、娑婆世界を救うために、『わざわざこの世界の苦しみや悩みを経験』、真剣に努力して来たというのです」と庭野開祖は説きます。

— 私たちが抱える「苦しみ・悩み」は、「この娑婆世界を救うために、わざわざ経験すること」だと説かれていますが、これは先の《^{しゆい}思惟のひととき ①》に通ずるものです。このことをもう一度、深めてみましょう。

ほんげ しだいぼさつ じょうしゅしょうどう し
本化の四大菩薩— (上首唱導の師)

(P411・1行/P321・1行)

『一を上^{じょうぎょう}行^{なづ}と名^{なづ}け、二を無^{むへんぎょう}邊^{なづ}行^{なづ}と名^{なづ}け、三を淨^{じょうぎょう}行^{なづ}と名^{なづ}け、四を安^{あんりゅうぎょう}立^{なづ}行^{なづ}と名^{なづ}く。是^この四^{ぼさつ}菩^そ薩^{しゅちゅう}其^{おい}の衆^{もつと}中^こに於^{じょうしゅしょうどう}て最^しも爲^しれ上^{じょうしゅしょうどう}首^し唱^し導^しの師^しなり』(二六〇頁 八行)

—— 上行、無邊行、淨行、安立行の四大菩薩は、あらゆる菩薩の最上位にあり、先頭に立ってみんなを導く指導者であります。

「上行」(初転法輪印) — 『至上の法を行ずるもの』(仏道無上誓願成)

「無邊行」(与願印) — 『無限の行をするもの』(法門無尽誓願学)

「淨行」(合掌印) — 『清浄な行をするもの』(煩惱無数誓願断)

「安立行」(降魔印) — 『確実な行をするもの』(衆生無辺誓願度)

これらの菩薩はすべて『行』と名の付く菩薩・実践の菩薩であります。迹門の教えで説かれた『諸法実相』の智慧を、現実生活に現わし、『仏性平等』の眞実を慈悲の行いに実践する行動者であります。

『是^この諸^{もろもろ}の衆^{しゅじょう}生^せは世^せ世^せより已^{このかた}來^{つね}、常^わに我^がが化^けを受^うけたり。亦^{また}過^か去^この諸^{しよぶつ}佛^{おい}に於^こて供^{くよう}養^{そんじゅう}・尊^{もろもろ}重^{ぜんこん}して諸^うの善^{すなわ}根^{みなしんじゆ}を種^{にょらい}えたり。～即^えち皆^い信^い受^いして如^{にょらい}來^えの慧^いに入り
にき』 (二六一頁 七行)

ずいき こころ
随喜の心

(P424・3行/P331・終2行)

随喜の心を発(おこ)したのを仏さまがおほめになったことも、大事なことです。～(教えられた理法を)理解すると同時に、教えに随喜する心を起こしてこそ、実践への大きなエネルギーが生ずるのであります。～ 随喜の心を起こさせることが、宗教の宗教たるゆえんであり、世を救う原動力となることを、説法者はよくよく心得ていなければならないのです。

『善^{ぜんざい}哉^{ぜんざい}善^{だいおう}哉^せ 大^{そん}雄^{もろもろ}世^{しゅじょうどう}尊^け 諸^どの衆^す生^{やす}等^{われら} 化^{ずいき}度^{こころ}したも^{おこ}うべ^{おこ}きこ^{おこ}と易^{おこ}し～我^{おこ}等^{おこ}随^{おこ}喜^{おこ}す
～ 善^{ぜんざい}哉^{ぜんざい}善^{ぜんなんし}哉^{ぜんなんし}、善^{なんだち}男^よ子^{にょらい}、汝^{おい}等^{ずいき}能^{こころ}く如^{おこ}來^{おこ}に於^{おこ}て随^{おこ}喜^{おこ}の心^{おこ}を發^{おこ}せり』 (二六二頁 一行)

『汝^{なんだち}等^ま當^{とも}に共^{いっしん}に一^{しゅうじん}心^{よろい}に精^き進^{けんご}の鎧^{こころ}を被^{おこ}、堅^{おこ}固^{おこ}の意^{おこ}を發^{おこ}すべし。～疑^ぎ悔^けあること
得^うることな^{ぶつち}か^しれ佛^{がた}智^{なんじ}は思^い議^だし叵^{にんぜん}し 汝^{なか}今^{じゅう}信^{じゅう}力^{じゅう}を出^{じゅう}して忍^{じゅう}善^{じゅう}の中^{じゅう}に住^{じゅう}せよ』
(二六五頁 六行)

信ずることの意義

(P447・1行/P350・終6行)

そこで「今のところはとりあえず、私の言葉を信じなさい」と仰せられるのです。じつは、この「信ずる」ということこそ宗教なのです。～ お釈迦さまは、ここで「何はともあれ、『純粹な心』でひたすら私の言うことを信じなさい」と仰せられています。～ 我々は虚心にそれを信ずればいいのです。どうしても信ずる気持ちになれない人は「縁なき衆生」です。仕方がないから、信ずる気持ちになるまで待つほかはありません。

《息惟のひととき ④》

「我々は虚心に(素直な心で純粹に)信ずればいいのです」と説かれています。―― 私は日ごろの信仰生活において、經典に書かれている仏さまの言葉や、庭野開祖、庭野会長の言葉を、素直に「信じて」いるでしょうか？ 振り返ってみましょう。

『亦人・天に依止して住せず』 (二六六頁 終二行)

人・天に依止せず

(P459・4行/P360・1行)

「人」すなわち他人を頼りにすることもなく、「天」すなわち神に頼むこともなく、自分自身をよりどころとし、法(真理)をよりどころとしている信仰姿勢です。～〈自灯明・法灯明〉の教えであって、千古不易(せんこふえき)の人生訓です。

《息惟のひととき ⑤》

「地涌の菩薩たちは『人を頼りにすることもなく、神に頼むこともなく、自分自身と法(真理)をよりどころ』としている」と説かれています。―― まさに〈自灯明・法灯明〉の姿勢そのものだと言えます。では、この姿勢と私の信仰姿勢と比較すると、どうでしょうか？ 振り返ってみましょう。

《庭野開祖 六つの誓い》

- (1) これからは、けっして嘘はつくまい。
- (2) カいっぱい働こう。
- (3) 他人の嫌がることを進んでやろう。
- (4) 他人と争わぬこと。どんなひどい目に会っても、神仏のおぼしめしと違って辛抱すること。
- (5) 仕事をするとき、人が見ていようとまいと、陰日向(かげひなた)なくはたらくこと。
- (6) どんなつまらない仕事でも、引き受けた以上は最善を尽くすこと。

仏の子である自信

(P463・5行/P363・終4行)

自分をどう見るか…それによって、他人や世間に対する態度が、どうにでも変わってくるものです。～ 自分は久遠本仏の分身である、子であるという意識に徹してしまえば、久遠本仏の慈悲がその人に満ち満ちるのですから、これぐらい力強いことはありません。 なにものをも憚(はばか)ることはありません。

《患惟のひととき ⑥》

庭野開祖は、「自分をどう見るか… それによって、他人や世間に対する態度が、どうにでも変わってくる」、「自分は久遠本仏の分身である、子であるという意識に徹してしまえば、久遠本仏の慈悲がその人に満ち満ちる」と説いています。

— 至らない自分が「久遠本仏の子」とだ自覚さえすれば、自分自身の中に(身の回りに)「久遠本仏の慈悲」が満ち満ちるという庭野開祖の教えを、あなたはどのように受け止めますか? かみ締めてみましょう。

『我今實語を説く 汝等一心に信ぜよ 我久遠より 來 是れ等の衆を教化せり』

(二六七頁 終行)

父少子老の譬え

(P476・終3行/P374・終5行)

法を破する罪業

(P482・3行/P378・終3行)

法を破するというのは、教えを害(そこな)うことです。それは単に自分だけが教えを信ぜず、教えにそむくというわけではありません。～ 他人がそれを信じようとするのを見れば、悪口を言ったり、反対理由を言い立てたりして、それをやめさせたがるようになります。～ 多くの人々の菩提心の芽を摘み取り、正しい教えの広がるのを断ち切ってしまうからです。それこそ、法を害(そこな)う最大の罪の行為と言わなければなりません。

『信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん』 (二七〇頁 一行)

《患惟のひととき ⑦》

『悪口を言ったり、反対理由を言い立てて、他人が信じようとするのを妨害する』、『人の菩提心の芽を摘み取る』ことは法を破する罪業であり、法を害(そこな)う最大の罪と庭野開祖は指導しています。

— 「人の精進、菩提心の芽を摘む」ことの一つに「法座で語られた内容を口外する」ことも上げられます。さて自分を含めて、自分の周囲でこうした『法を破する罪業』が見当たるのか? 見当たらないか? 振り返ってみましょう。

『^{せけん}世間の^{ほう}法に^そ染ま^{ごと}ざる^{ごと}こと ^{れんげ}蓮華の^{みず}水に^あ在る^{ごと}が如し』 (二七〇頁 七行)

^{れんげ}蓮華の^{みず}水に^あ在る^{ごと}が如し

(P485・5行/P381・8行)

菩薩の道すなわち大乘の教えをすっかり身につけ、俗世間のなかに住みながら、俗世間のさまざまな汚(けが)れに影響されないのは、ちょうど蓮の花が泥水に咲いて、しかも清らかで、美しく、いささかの汚(けが)れもないのと同様であるということです。
菩薩の性格をじつに簡潔・適確に表現した名句といえましょう。

これは単に自分だけが教えを信ぜず、教えにそむくというわけではありません。～他人がそれ

《^し急^{ゆい}惟の^{ふい}ふいかえい ^ままとめ》

今日の『從地涌出品 第十五』の学びを通して、何を学び取ったか？ (または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

合 掌